



博士の視点で改革論議を

杉森 純



「ポスドク1万人計画」で誕生した大量の博士研究員が行き場を失って漂流している。任期付の職を転々として、40歳近くになっても能力を生かせる職を得られない人も多い。1人あたり1億円近い税金を使って育てた先端科学技術の人材を活用できないのは、国の壮大な無駄使いでもある。苦悩する先輩の姿を見て、学生の博士離れ、理系離れが加速している。

読売新聞の科学面で昨年、こうした問題を「漂う博士」として連載した。博士たちの苦悩を取材して、問題が社会や大学の制度に深く根差し、解決策が容易に見つからないことを痛感した。将来の大学院教育改革などの議論はあるものの、悩みに直面している博士たちをどう救うのかという処方箋をまったく見いだせない。

こうした苦労はなかなか世の中に伝わらない。「末は博士か、大臣か」と言うように、博士はエリートとされている。「好きなことをやっている」というイメージもある。

読者からは「親がようやく就職の苦労を理解してくれるようになった」という反響もあった。不安定な身分で、短期間に成果が求められる中、結婚、出産、育児とどう両立させるか悩んでいる女性も多い。過酷な競争は、研究不正を生む心理的な土壌にもなりかねない。

先輩の苦労は、後輩の進路選択に影響を与えている。自分によほど自信がない限り、「ハイリスク・ローリターン」の博士課程進学をためらうのは当然だろう。博士の就職難は、需要と供給のミスマッチが最大の理由だ。大学院重点化で、博士の数が大幅に増える中、多くの博士が希望する、大学や公的研究機関の若手のポジションは削られた。

視野を広げて、もっと企業に就職して、官公庁やマスコミ、弁理士なども目指せと、博士の進路を多様化する取り組みが盛んだ。博士が幅広い分野で活躍するのはもちろん大切だ。でも、今の取り組みは「余ったから、大学以外で活用してくれ」という感じがぬぐい去れない。博士たちの意思が余り感じられないからだ。

欧米に比べて、大学院生への経済的な支援が貧弱な中、博士の多くは、自分たちで学費を払い、生活費を工面して、大学院で学んでいる。企業に就職しても、博士だからといって、特別優遇されるわけではない。博士課程に進むのは、経済的に見れば「大きな損」だ。それを承知で、敢えて研究者の道を目指している。幅広く、柔軟に進路を選べというのなら、奨学金を充実させ、学費や生活費を心配せずに、学べる環境作りがまず先決だろう。

「大学が一番上」という意識が、教授たちに残っている限り、いくら進路の多様化を訴えても、博士たちの心に響かない。そもそも、企業に就職しようにも、博士たちは「視野が狭い」「柔軟性がない」と敬遠されがちだ。理科系の修士からメーカーなどへの就職は引く手あまたなのに、3年間博士課程で学ぶと、一転して就職が難しくなる。付加価値を付けるどころか、逆に価値を下げてしまっているのが実情。まるで、「中古のマンション」のようだ。

こんな状況に、博士たちが、どうしてもっと怒りの声を上げないのか不思議だ。もちろん博士たちにも問題はある。

就職支援する人材コンサルタントたちが口を揃えるのは、「自分の棚卸し」の必要性だ。自分は何ができて、何をしたいのか。博士の多くは、自分自身と真剣に向き合った経験がないと指摘する。「好きで、研究一筋にやってきた」と言うと格好良いが、流されて決断を先送りしてきた面はないだろうか。「博士は社会性に欠ける」は偏見だが、それを許す状況に、甘えもあったはずだ。

何よりも取材で気になるのは、ポスドクの自信のなさだ。「ポスドクでも成功者がいるだけに、うまくいかないのは自分が悪いと思ってしまう」という話も聞いた。でも、周囲の状況を見れば、行政や大学、企業に頼っていても、何も解決しないということが分かるはずだ。自分に自信を持って、実力と価値を、証明するしかない。

経済協力開発機構（OECD）の国際学習到達度調査で、日本の15歳の科学的応用力が2位から6位に転落した。政府や大学は「科学技術創造立国の足元が揺らぐ」と、中高生の理系離れを嘆くが、博士たちの現状を改善せずに、理系の夢ばかり語るのは欺瞞だ。

先輩たちの苦労を見て、大学院に進学せずに高校の理科教諭になった男性が、「後輩たちの夢を大切にするか」「現実を伝えるべきか」と悩む姿が、取材で印象に残っている。

働きバチは、自分たちの集団のために、自己犠牲を払って働いている訳ではない。自分のために、遺伝子を残そうと一生懸命なのが、結果的に自分たちの集団に役立っているのだ。

ポスドク問題や大学院改革の議論も、博士たちが自分の夢や幸せを追求することが、結果的に、日本の科学技術力を高め、大学の魅力を増すものだというのを忘れないで欲しい。